

啄木「葬列」論

——詩から小説へ——

上 田 博

「洪民日記」によると、小説「葬列」は明治三十九年十一月十九日夜に起稿し、同月二十二日夜までに「前半五十七枚を脱稿」して、十二月一日発行の『明星』に発表された。啄木自身「前半五十七枚」と書いており、また掲載誌にも「(以下統出)」、「次号にて完結すべし。」の文字が見られるところから、統稿を予定した小説であるが、この後、統稿執筆はなされていぬ。

「葬列」は「雲は天才である」「面影」に次ぐ、啄木の小説第三作であるが、前記二作品がいずれも未発表(「面影」の原稿は明治四十年八月二十五日の函館大火で焼失したという。)に終わっており、『明星』が身内の雑誌とはいいいえ、外部に発表されたという意味では処女作と言えよう。

十二月三日、東京から『明星』十二月号が洪民村の農家に寄寓

啄木「葬列」論

する啄木の許に届けられた。啄木は開封する手ももどかしく、「初めて活字の厄介になつた」雑誌をひらいて胸をときめかせたのであった。啄木は「葬列」の掲載順番(小説では二番目)や原稿の占有分量(全頁の約五分の一)にも得意を覚えている。ちなみに十二月号には四本の小説(村山鳥遼「片輪同志」七頁分、「葬列」二十一分、てい子「市女笠」三頁分、長浜よし子「弱き女」十四頁分)が掲載されている。啄木は「アンナにメ切後に送つたのに、ズット前の方へ、二十頁余。」とわざわざ日記につけており、さらに、『あこがれ』の詩人の初めての小説に対する反響を刻明に日記に記している。啄木の小説への心意気の高さが伝わってこよう。

以下、抄出しておこう。
金田一京助評「凡そ後半の文字は、私、鏡花漱石以上のものと賛して憚らぬ」

瀬川藻外評「人生と自然とを刻々破壊しゆく文明の勢力を呪ふて、来るべき夏には兄と共に不來方城頭に追憶の涙をそそが

茅野蕭々評「『葬列』のあととは無きにや」
 小島烏水評「多大の敬服を以て拜読、あとが待たれ候」
 与謝野鉄幹評「『葬列』も随分タシカナル人々の間に批難多し。批難をも反省の料とするは美德と存候。此度は詩作を御見せ被下度候」

右の各評について、金田一評は小説の「後半の文字」に注目している点光るが、「漱石鏡花以上」ときては過褒。藁外評は小説のモチーフを読み取ってはいいるが、その文学表現の成否を問うていない点憾みが残る。評者自身、実名で登場しており、個人的感慨によってかなり加添されている。烏水評は単なる外交辞令。鉄幹の評は抽象的な言いまわしではあるが、「葬列」が「タシカナル人々」の間で全く問題にもされなかった小説であることを明かしている。《小説家啄木》の前途多難を暗示する一挿話であるが、当の本人は「批難よし、唯、自由に自己の作物を公にしうべき予一人の天地を有せむことを。批難の矢は決して予の生命をたつことあらじ。」と言ひ、鉄幹の忠告を個人的な厭味と受け取っている。この時、啄木の念頭には一号雑誌に終わった『小天地』への愛惜がふと浮んだのであろう。以上に掲げた各評とその反応のうちに「葬列」のさまざまな問題が暗示されている。

二つの葬列が通り過ぎて行く。四人の葬列であり、今一つは狂人高沼繁の葬列である。突然、お夏は繁の葬列に取り縋って泣き叫ぶ。この時、立花の頭の中で眼前の旧知の男女の名が触れ合い、「其一利那、或る荘厳な、金色燦然たる一光景が電光の如く湧いて自分の両眼に立ち塞がった」のである。

ここまで前半部のストーリーの要約を試みたが、筋立ての未熟さ故に、要約は困難である。それからあらぬか、啄木は前半部の終わりに、自分でストーリーの要約を付記している。

自分は既に、五年振りで此市に来て目前観察した種々の変遷と、それを見た自分の感想とを叙べ、又此市と自分との関係から、盛岡は美しい日本の都会の一つである事、此美しい都市が、雨と夜と秋との場合に最も自分の氣に入るといふ事を叙べ、そして雨と夜との盛岡の趣味に就いても多少の記述を試みた。

啄木の手になる右の要約は文学的描写とは無縁の文章であり、記述そのものである。この記述の挿入によって小説的結構がいくつか離れ、後半部のお夏、繁を中心とする展開への繋ぎ目が不自然になっている。

ここで前半のプロットを簡条的に整理してみると、(1)立花の閨歴についての饒舌、(2)不来方城趾をめぐるとりとめのない空想、(3)盛岡の四季についての語り、(4)母校での過ぎし日の奇談、(5)二つの葬列の五点より成っている。(5)は後半に繋がってゆくプロットであるが、(1)~(4)のプロットのうち、いずれが主要なプロット

まずは「葬列」のストーリーについて紹介し、その後、結構面

の問題に言及しよう。
 主人公立花浩一は中学校教員で、五年ぶりに「第二の故郷」である盛岡に史跡調査のために帰省して、伯母の家に滞在する。小説前半はこの立花の紹介がなされる。彼は二十幾年前に盛岡から十数哩離れたある寒村に生まれ、村の尋常小学校を最優等で卒業した。十歳から八年間、盛岡の親戚の家に下宿して進学し、先輩から「ナポレオンの肖像に似て居る」と言われ、「うら若き美しい人」に恋もした。十八歳で上京し、さる高名な歴史学者に師事し、文部省の検定試験で歴史科中学教員の免許を受け、現在は茨木県の中学校で教鞭をとっている。両親と妹の家族で、つましい生活をしている。

立花は五年ぶりに見る「第二の故郷」がかつての「眠れる都会」の面影をとどめず、大きく変容した姿に「無性に悲し」みを覚える。立花には盛岡の詩趣は「雨と夜と秋」にあると思われる。立花の思いは中学時代の「一奇談」に入り、親友藁外と花柳を訪ねた折りに、中学の教師からあらぬ疑いをかけられた一件が語られる。話は三転。

久しぶりに立ち寄った母校で、お夏と呼ばれている女乞食が、赤ん坊に乳をふくませていた場面に出会う。やがて立花の眼前を
 であり、副次的、傍系的プロットであるのか判然としない。「小説に統一あらしめる唯一の方法は、直接にも間接にも継続の展開に貢献するところのないような事件は、想念の中から排除してしまふことである。」とする小説構成上の原則が忘れられている。このことは、啄木の小説技術の稚拙さを物語っていると同時に、自身収束のつかない紛然たる詩的情熱を思いもかけず漏らしていることを意味するのではないだろうか。この点は後述することになる。

「葬列」は幾人かの実在の人物をモデルに書かれている。まず啄木自身が明かしている人物を挙げておく。

浅沼茂が標本である。——小説中では高沼繁と呼ばれる。
 お夏といふのも実際の人物。
 藁外は瀬川深君、花郷は小林茂雄君、この号も本物。但し須山教師は空想中の人。

新山堂の伯母さんの家といふのは、我がせつ子の実家である。馬場の先生は新渡戸仙岳先生。鹿川先生は猪川先生。姉の家の魚店に変わっているのも事実。

但し本物の繁は死んだのではない。
 主人公立花については啄木はコメントしていないが、別号「白顔」と書けば、余を見るまでもなく啄木自身である。今、モデル



(上田寅次郎氏)

について考えなければならないのは、前半における立花と後半の繁、お夏のそれぞれである。

まず立花浩一について。

立花は啄木の分身だと言っておいたが、立花の経歴と啄木のそれを重ねてみると、大筋では合致しても、いくつかの点で異同が発見される。(1)盛岡を退いて上京し、「さる高名な歴史家の書生」になり、「文部省の検定試験を受けて、歴史科中等教員の免状を貰ふた。」こと。(2)現在は「茨木県第〇中学の助教諭」であること。(3)「校長から常陸郷土史の材料蒐集を嘱託」せられ、「厨川柵を中心とした安部氏勃興の史料」に関する実地調査のために夏季休暇に帰省すること。

周知の通り啄木は、「葬列」執筆時、渋民村にあって尋常小学

時、上田寅次郎の家族は、父重行が米屋開業に失敗して失踪し、残された母光子は四人の子供を抱えて女看守になって養育したといわれる。

一方、文学によって人生の新局面を切りひらくべく、盛岡中学を決然退学し上京した啄木は、志半ばにして病を得て帰郷、禪房に病軀を養いつつ雌伏一年。盛岡市内で上田寅次郎に再会した。歴史主任を辞して、郷党の敬慕切なる那珂博士の膝下で歴史の勉強をすべく上京を企てる上田寅次郎の「研学」の姿に激しく心動かされるものがあつたのであろう。上田寅次郎との興味つきぬ清談から二年。この間、父一禎の任職罷免、一家の宝徳寺からの退去、盛岡における節子を娶っての新生活、定職を持たない売り食い生活、『小天地』の発行と挫折、そして宝徳寺への再住運動に一家の命運を賭した渋民への帰村。「予は一生の中に、是非一度は何処かの中学の西洋史の先生にもなる積りで居るし、何巻か洋史書も著はす積り」(林中書)であると抱負を語る啄木であるが、現実には石川再住支持派と後住者中村支持派との政治的、感情的対立は泥沼化し、石川家にはいよいよ予断を許さぬ様相であった。今、「葬列」を書く啄木の脳裡に、逆境の中でなおも「研学」の志を貫いた上田寅次郎の意志的な姿が鮮明に蘇ってきたのであろう。立花浩一は啄木の分身にとどまらず、啄木の見果てぬ夢が仮託されたのである。

校の代用教員であり、小説にいう「五年前」にさかのぼってみても、盛岡中学校中退後、一時期東京生活を送るが、上記のとき体験はない。立花の先述三点の設定についての啄木の発言は発見することができないが、立花の人物形象に使われたと思しき人物が啄木日記に登場する。「甲辰詩程(啄木庵日誌)」一月九日の記事である。

午前早く、沖方に阿部君を訪はんとして、途に上田寅次郎氏に遭ふ。思想の人、研学の人、文芸の人、而して今は遠野中学に於ける歴史科の教諭なり。(中略)夜、上田寅次郎氏を大沢河原に訪ひ、談、詩、文、宗教に涉り、興味つきず、平明好謔の雑談のうち、猶犯しがたき敬虔の念を起さしむ。賢なる哉、又敬すべきかな。我詩稿を送るべきを約して十時辞しかへる。

上田寅次郎についてはすでに浦田敬三氏の調査^②があり、筆者も寅次郎の令息上田重彦氏(作家石上玄一郎)から直接の教示を受ける機会を得た。

今、「葬列」のモデル問題に限って上田寅次郎の経歴をあげる。明治二十五年、下橋の盛岡高等小学校卒業後、東京専門学校文学科を経て、三十四年、岩手県立遠野中学校助教諭、この間、文部省の検定試験に合格し、教諭昇任により同校歴史主任を命ぜられる。三十七年六月、同校退職し、同年九月から早稲田大学(三十七年四月より専門学校令による「大学」となり、校名改称)の東洋史講師那珂通世文学博士の東洋史の講義を聴講すべく上京した。当

四

すでに瀬川藻外評に見たように、「人生と自然とを刻々破壊しゆく文明の勢力」への呪詛と自然美への心酔を序章にして、後半狂人繁と狂女お夏の「地上の舞」に舞台は一転回する。立花は「空に葉の舞、地に人の舞」う目前の光景に、「唯、恍として、茫茫として、漠として」我を忘れる。主客合一の浪漫的境地がモチーフになっていよう。

ところで、「狂人」を題材に浪漫的世界を描こうとする啄木の構想は「渋民日記」八月の項に何点かメモされている。左に摘記しておく。

(1) 荒廃した大家に、ひとり生き残つた、神経質で教育ある一青年(二十四五歳)が発狂して、その後数年の後に自殺する、といふ仕組み。これは狂人の脳裡に宿る思想を書くのが主眼。長篇
(2) 馬鹿茂とお夏(乞食)との話。(事実)狂者茂とお夏とが盛岡新山堂の社前で、秋の公孫樹の黄金の葉の雨とふる暁に手を取つて舞ふといふ話。

(3) 伊五沢千代治、狂人。(事実)

夜渋民村を見下す。夕の景を見て跳り上がる。(狂人の幸福)

(4) 本年三月四日、乃ち予が帰任してからの渋民村、(一大社会小説)。(中略)《挿話》愛宕山上の焚火。乞食の女。超道徳。

(2)(3)は事実取材。(1)(4)は構想されたもの。ただし(4)はベース

に事実を置いて見られる。このうち小説化したのは(2)であるが、(4)はすでに半ばまで執筆していた「雲は天才である」の延長に構想されていたのかもしれない。右の構想で共通するのはいずれも「狂人」であり、「乞食」を登場させていることである。こうした啄木の関心状況の意味については後に問うことになるだろう。今は構想(2)のように肉付けされたか見ておきたい。

繁は「背のヒヨロ高い、三十前後の薄髯の生えた、痩せこけた頬に些の血色もない、塵埃だらけの短い袷を着て、穢れた白足袋を穿いて、色褪せた花染メリンスの女帯を締めて、赤い木綿の截片を捲いて」いる。しかしこの「無邪気な狂人」繁には「父もあり母もある、また家もある。にも不拘、常に此新山堂下の白狐籠を無賃の宿として居る」のである。繁とお夏の出会い、彼の白狐籠をお夏に占拠されたのに始まる。

お夏は「赤縞の、然し今はただ一色に穢れはてた、肩揚のある綿入を着」た、「二十の上を一つ二つ、頸筋は垢で真黒だが、顔は円くて色が白い」女である。お夏はもとほ雫石の旅館に十二の時から下婢として勤めに出、「年を重ねるに従つて段々愚かさが増して来た」と言われる。或る年の春、連れ合いに死別したとかがいう「独身者の法界屋」が泊った夜、お夏の拳動は余程怪しかったが、翌日の朝、男の立ち去った後を追いかけるように旅館から姿を消し、しばらく後に帰ってきたときには、もう「本当の愚女になつて居て、主人であつた人に逢ふても、昔の礼さへ云はなんだ」という。

「波民日記」中の次のくだりは、啄木における詩から小説への移行を考える手がかりを与えてくれる。

昨年暮の頃であつた。新山堂の孝子さんがその当時盛岡加賀野積町であつた子の家へ遊びに来ての話に、茂がお夏にかの白狐籠を占領されて、猫の様に哮んだといふ事をきいた。子はそれが非常に愉快に感じられた。その後、この事を是非書いて見ようと思つて居たのであつた。

右の題材はまずは詩的ビジョンの中にうたい出された。詩篇「みちのくの神無月」(明治三十八年十二月六日夜製作)がそれであるが、この詩は「葬列」後半の原画でもある。

冒頭、詩的背景がうたい出される。

今、みちのくの神無月、花めき散らふ
 裳のみだれ、かたむきかかる日の錆の
 幹あからさま透きいれる
 漆の木原。——夢白の裾長らかに
 枝つたひ幻にひく秋姫が、
 わかれ心に朽筭篋の弛み緒ならす
 浮鳴りのそゝ音に走る空名残、
 それとし聞くは、金蝶の
 籠はなれせし千万羽、——

霜の絵映の黄染葉の日にひらめきて、
 秋の舞、散りに散りしく葉ずれ言。

夢幻の香気を放ちながら、落寞たる季節に急ぐみちのくの晩秋。

啄木「葬列」論

広い神社の境内の中央に「雲を凌いで立つ一株の大公孫樹」、葉という葉はすべて「黄金の色」に装いを凝らす「曙の光」の中、繁とお夏は「神の御庭に地上の舞を舞ふ」のである。立花はこの光景に眺め入り、恍として「全く現実といふ観念を忘れて了」うのである。この時彼の脳裡にプラトンの「狂者は天の寵児だ」といったことは思い浮かぶのである。以上は五年前の神無月の或る朝早く、「史学研究の大望」を抱いて上京を思い立った立花が、暫しの別離を惜しんだ伯母の家に接する稲荷社の境内に目撃した光景である。

過去の追憶から目醒めた立花の前には、盛岡中学の校庭で、「二歳許りの石塊の様な児に乳房を啣ませて」いるお夏が居り、死骸に変じた繁は見すばらしい葬列に送られて行く。「神の御庭の朝の野に、遙か下界から運び上げられた二人の舞人」、「一点たりとも虚偽の陰影の潜む」ことのない「狂人の乱舞」の後日譚。男は冷たい軀に、残された女は男の棺にとりすがり、送葬人に足蹴にされて赤児の「烈しい悲鳴」。続稿を予定した小説ではあるが、ここまでによつても小説後半のテーマは狂人繁とお夏の過去と現在、五年の歲月の二人の上に流れた人生の暗転にあるのではあるまいか。

五

「葬列」のモデルについての啄木のコメントを紹介した前掲

凶作に苦吟する野がえりの老農夫二人。嘎れ声も高く、「みので枯れし稲よりは、閨の戸までも来てわめく税吏等が首をこそ刈るべけれとて鎌をとげ」と語らいつつ通り過ぎて行く。杉寺の境内に老比丘が無量寿品を誦し、高公孫樹の舞い納め、「莊嚴の神色迫る」頃、そこに姿を現わす「旅づかれせし足重の、芸人めきし」影二つ。

力なく、『あはれ八里のむだあるき、つかれしや。』とぞ

都訛りにふりかへる、五つの紋の

古袷、肩も寒げの三十男。

『否。』と答へて、女声、

(中略)

みめこそ見えね、顔白の、二十歳か、

いづれ、門毎に扇をかざす唄少女。

桃色褪せの長襦、裾ばさみせし

縞袴、今、悄々とおちにたれ。

行き過ぎにして、男、また、

琴絃を掻くすさび言、

『安宿の吊洋燈にもかぎはあれ、

とまるすべなき法界屋かな。』

後年、啄木はかつての自分の詩について、「空想と幼稚な音楽と、それから微弱な宗教的要素(乃至はそれに類した要素)の外には、因襲的な感情のある許り」(弓町より)であったと厳しい論告を下すはずであるが、右の詩篇は晩秋の散り急ぐ葉しぐれと伽藍を

背景に、微かな読経の流れる中、凶荒に苦しむ農夫と零落した旅芸人の姿が一幅の詩的ビジョンのうちに収められている。詩的構成に「微かな宗教的要素」は勿論のこと、農夫の呻吟のくぐりは一読明らかなごとく憶良の「貧窮問答歌」を想到させ、「因襲的な感情」も動員されている。ここには、「幼稚な音楽」、「微かな宗教的要素」、「因襲的な感情」のいずれもが指摘できるとしても、詩的世界はとりとめのない「空想」の産物ではない。相愛の旅芸人は実在の茂とお夏の詩的昇華であり、苦吟する農夫の姿は天明、天保以上の大凶作と記録される明治三十八年の霖雨低湿、暴風雨によって引きおこされた東北全域を襲った大凶作と飢餓の生活に死地をさまよう東北農民の姿が重ね合わされているのである。詩的表現上の稚拙さは否定すべくもないが、人生の悲惨、人生の痛苦を人生の事実として詩的表現の中へ掬い上げて行こうとする詩意識は感得することができよう。しかし、啄木が後に「詩は本来或る制約がある。詩が真の自由を得た時は、それが全く散文になつて了つた時でなければならぬ。」と書くのは、詩は本来〈語り〉ではなく、〈うたい〉であることを実感していたからである。今、「みちのくの神無月」に右の事柄をみれば、相愛する男女の人生の痛苦も、結末は「石の泣く音もきゝぬべき夜」のしじまのうちに覆われてしまふのであり、凶作に苦しみ、苛酷な税吏への怒りのほむらも、老比丘の無量寿品の読経にかき消されてゆくのである。人生の痛苦を詩人は共に悲しみ、哀訴することができて、その実体を展げ、意味を追尋する役目は小説にバトンタッチをせ

六

評論「林中書」(盛岡中学校「校友会雑誌」第九号 明40・3・1)は「葬列」の脱稿なつた翌日(十一月二十三日起筆、十二月三日脱稿)の冒頭近くに(全文、四〇〇字詰約四十三枚相当。左の引用文は最初から約十枚目の辺りの文章、「葬列」について次のような文章が見える。)

「葬列」は舞台を盛岡にとつて居る。中には母校に関する

記事も少なくない。鶏なく頃枕に就いたが、足が冷えて来て眠られなかつた。眠りかぬる予の眼にニユツと立塞つた、雪白の衣を着た一巨人がある。噫それは外でもない、不来方墟畔の秋風に吹かれて立つて居る一大白亜城であつた、母校であつた。予は往時を追懐して泣いた。真に泣いた。予の来方には泣くべき種が沢山あるのである。

「眠りかぬる」啄木の眼前に「ニユツと立塞つた」母校の白亜の姿は、「葬列」の描写そのままである。「葬列」に描かれた白亜館が脱稿なつたその夜の枕に立ったというのが前後の関係であるが、このことは啄木にとって母校がただならぬ意味を帯びていたことを意味しよう。「林中書」のこのくだりが啄木の誇張ではなかつたことを傍証するために先に原稿の位置を数えるという瑣末な作業をした。そうしてこの白亜館盛岡中学と女乞食の小説におけるとり合わけの含意について一考する必要がある。

立花はこの両者のとり合わせを、「敢て醜悪とは感じなかつた」と言い、さらに「この光景は、大都会乃至は凡ての他の大都会に決して無い事、否、有るべからざる事であるが、然し此盛岡には常に有る事、否、之あるがために却つて盛岡の盛岡たる所以を發揮して見せる必要な条件であるのだ。」と考えるのである。奥歯に物の挟まったような言い方であるが、おそらくはこのもくもくとした言い方の中に、啄木と盛岡中学との「特別な関係」(「林中書」が秘められているように思われる。

啄木は「林中書」に、自分は「盛岡中学校の七月児で、今、み

ざるをえないだろう。

小説「葬列」は詩「みちのくの神無月」のほぼ一年後に書かれたが、ここにはまだ自己陶醉があり、詩的混沌の名残があり、〈語り〉に必要な、対象と自己(創作主体)との分化が不明確である。にもかかわらず、「葬列」の男女——繁には「無邪気な狂人」にごく普通の家庭があり、「本当の愚女」お夏にはそこになり果てる日常の時間と事件とを描き込んでいる。その書き込みが不十分であることは認めざるをえないとしても、五年のうちに起きた彼らの境涯の変化、落差の中に人生の暗転、一つの人生の悲惨を描こうとした意図までを否定することはできない。このような事どもは詩に内在する「或る制約」によって詩表現の外側へ押し出されざるをえなかつたものであり、それを外側で待ちうけて掬い上げたのが小説である。整合性のある小説的結構に構成されなかつたとはいへ、啄木の内部に〈詩人啄木〉に代わる〈小説家啄木〉が胎生しつつあつたと言つてもよいだろう。

ちのくの林中の草の根方に転がつて居る石塊だ。」と書くが、「七月児」の未熟児といい、「草の根方」の「石塊」というのも、むしろ自己輻晦に他ならない。啄木の心意は次のようであるだろう。すなわち、打ち棄てられるべきは「七月児」に對置されている「十月児」であり、彼らこそ「凡人のみを養成」する「哀れなる日本」の教育」によって完成品化された人間である。「林中書」の筆鋒はここから日本と露国との文明の対比へと進んでゆく。日露戦争において、「敗けた国の文明」と「戦争に勝つた国の文明」とを比較してみるに、「東洋唯一の立憲国」を誇るわが日本が、「世界の動物園」(「戦雲余録」)露国の生んだ文豪トルストイやゴルキイに比肩しうる文化を有しているかどうか。

日本人に与へられたる一切の自由よりも、一切の不自由の中に居て真の自由を絶呼した杜翁の一老驅の方が貴いと云ふ事が出来る。又同じ意味に於て、予は華やかな明治一切の文物よりも、浮浪者上りの幾度となく監獄の門をくぐつた、肺病患者のゴルキイの方が、真の文明の爲めに、遙かに／＼祝すべきであると考へる……予は石塊である、が同時に日本人中の一人である。

「華やかな明治一切の文物」の対極に「浮浪者上りの幾度となく監獄の門をくぐつた、肺病患者のゴルキイ」が配置される。

そのゴルキイの足許にそつと置かれた「石塊」。白亜の母校盛岡中学校の校庭に蹲る薄汚ない狂者女乞食を「醜悪」と感じない立花の心意を解いてみれば、「七月児」啄木の矜負がそこにかくさ

れていることが明らかになる。しかし、この矜負の心情は単純ではない。何故ならば、いかに「十月児」に対するに「七月児」の人間の勝利を誇負しようとも、また、「職業は、夢想を本職とし程近い」○△小学校の代用教員を副業に勤めて居る」と強がり言ってみても、「本職の方からは一文の収入」も入っては来ず、「副業によつて毎月大枚八円」の月給取り生活が現実である。事実は「脆くも一敗地にまみれた残兵」である。そうして人生の「残兵」の境涯に甘んじなければならなかったそもその遠因は、「十月児」としての卒業を目前に控えて、「母校の胸から時ならず暴れ出した」行動にあったのである。しかし啄木にすれば学校生活によつて得たものは「『人生』といふ不可測」なるものとは何のかわりもない単なる「智識」(国文法や幾何や三角やの如く安撫なもの)に過ぎなかったということであり、しかも「智識」を授かった同じ場所で、「人生」という「禁制の木の実」の刺戟的な味覚を「母校在学中」に味わってしまったというアイロニカルな経験である。啄木のいう盛岡中学との「或る特別な関係」とはかく

のごときいわば二律背反的な相貌を示すことばであると考えられるのである。「世にすね人に隠れたる此身も、母校よ汝が昔を懐へば、矢張り並に熱い涙も流れる。ありし日の若さの再び心の枝にかへる心地もする。噫、予も亦昔汝の懐に抱かれた子であつた、夕(傍点筆者)と「林中書」に書き込む啄木の心情こそが、彼の深部から発声された肉声であろう。ここまで来ると、「葬列」の盛岡中学校と狂者女乞食お夏との組み合わせの構図に想到する

ことは容易であろう。白亜の母校と、「一敗地にまみれた残兵」。「浮浪者上りの幾度となく監獄の門をくぐつた、肺病患者のゴルキイ」に自己を擬装した啄木との関係の文学的イメージ化が先の構図の意味であろう。

七

「葬列」は結局は主人公立花浩一の物語である。盛岡の自然美も、町並の変化、狂者の乱舞も葬列も、すべては立花の目撃し、体験したことであり、立花の目を通過して語り出されるところに彼の人間像が浮上する仕掛けになっている。以上のことをふまえた上で最後に明らかにすべきことは「葬列」を書かねばならなかった理由、つまり「葬列」の小説行為についてである。三章に立花浩一の人物形象を分析して、啄木プラス上田寅次郎であることを明らかにしておいた。立花像は上田寅次郎を加えた分だけ、啄木の等身像とは言えないが、しかし、上田寅次郎の生き方を啄木の果たしえなかった内的欲求であったとすれば、立花の形象は啄木自身をモデルにしたと解釈しても差支えないだろう。啄木が上田寅次郎を人物形象に用いたのは、自身、盛岡中学校の「七月児」であるが故に、あるいはまた、早い結婚と一家の生活の糊口の責任から逃れる現実的な契機をつかむことができなかつたが故に、田舎の小学校の代用教員の生活に甘んじなければならなかつた苦衷が、社会科の中学校教員として史跡調査の目的で来盛する

設定を生んだのである。しかも小説の舞台を、小説執筆の場である故郷浜民村にせず盛岡に移し、その「第二の故郷」に錦を飾るという筋立てにこの小説行為の意味がいっそう明らかになる。

啄木の伝記的事実に見る軌跡は、盛岡中学校中退の後、第一回目の東京生活の失敗(十八歳)↓一年八月の間、一家の宝徳寺からの退志節(後)↓第二回目の東京生活↓(この間、一家の宝徳寺からの退志節子と結婚し、盛岡生活↓宝徳寺再住実現をかけて浜民村へ帰村。しかし、帰村の目的実現がいよいよ困難な状況に追い込まれていた)。

これに対して「葬列」における立花の足どりは、「第二の故郷」(盛岡、十八歳の春)↓「第一の故郷」↓(浜民、十幾ヶ月の間隠棲)東京生活(有名な歴史家に師事し、文部省の検定試験に合格)↓茨城県の中学校教諭↓盛岡に一時帰省(史跡調査、二十三歳)という設定である。両者の軌跡を対照すれば、全く裏返しの関係にあることが明らかになる。上田寅次郎を人物形象に用いたこと、および啄木自身の現実の足どりを裏返して筋立てに用いたことの二点によつて、「葬列」の小説行為が、「現実」の場で実現不可能であったものを、「想像」の場で回復(実現)するということ、いわば自己救済の役目を果たしたのである。このような文学行為は浪漫主義の文学精神そのものであるが、ここまで来れば、前作「雲は天才である」との関係が問題にならざるをえない。

「雲は天才である」は三十九年七月三日に起筆し、中絶のまま十一月中旬に一部分書き直したが、ついに脱稿に至らず陽の目を

見なかつた小説である。この小説については拙稿(『啄木 小説の世界』所収)に言及済みであるが、ここで中絶について簡単に繰り返しておこう。

啄木の等身大の主人公新田耕助一派(善玉)が、校長一派(悪玉)に対して教育方法をめぐる論争で完全に勝利を収める。(前半)

新田を石本という青年が訪ねて来校し、石本を通して新田の心友天野朱雲の戦闘的的人生観が語られる。(後半)

小説が中絶してしまつたのは、登場人物を背後で操作していた作者が、次第にその人物(天野朱雲)の内面に埋没しはじめ、ついに自己同一の極点に至つたところで筆が投げ出されたのである。

「浜民日記」に、「十一月中旬、予は旧稿『雲は天才である』の一部分を書き直した。」とあり、続いて『葬列』について、「予は十九日夜に稿を起し」たと記している。推測するに、啄木は『明星』に小説を発表すべく旧稿「雲は天才である」を取り出し、一部改稿を試みたが、少々の手直しによつては続稿できない小説構造上の欠陥(その最大のもは登場人物と作者の距離設定)に気付いたのであるまいか。その上、さらに考えうることは、村内の反石川派の「政治的包囲網」によつて鬱屈していた心情を小説という「白兵戦の武器」を用いて外部へ爆発させるために「雲は天才である」を書き出したのであつたが、十一月中旬にはそうした小説はすでに色褪せて見えただけではないか。善玉が悪玉に全面的に勝利し、登場人物と共に作者が自己陶醉するという文学行為を退

けようとする内発力が啄木のうちに胎動しはじめていたのではな
いだろうか。「葬列」はかく考えてみると、「小説形式としては
まったくまとまりのない浪漫的恣意によるもの」(傍点筆者)とし
て退けられない作品であると言えよう。

注① 木村毅『小説研究十六講』恒文社版 一八一頁

② 『啄木その周辺』熊谷印刷出版部 一〇八頁〜一〇九頁

『那珂通世遺書』 五四頁〜五九頁

③ 小田切秀雄「解説」『石川啄木全集』筑摩書房 四四五頁

付記

小稿中、上田寅次郎氏については、ご長男にあたる上田重彦氏
(作家石上玄一郎)から貴重なお話と写真の提供をしていただい
た。特記して深甚の謝意を表したい。

(うえだひろし 本学助教授)

芥川龍之介と戯曲

——「青年と死と」を中心に——

森 崎 光 子

大正三、四年頃、芥川龍之介は戯曲の執筆をさかんに試みてい
た。だが、現在私どもの目にすることができるのは、ほとんど
断片、未定稿の類であり、完成した作品として発表されたのは、
「青年と死と」ただ一作のみであった。

「青年と死と」①は、大正三年九月、第三次『新思潮』一卷八号
に柳川隆之介の筆名で掲載された。この作品の成立事情について、
同号巻末の「Spreading the News」は、次のように述べている。

□柳川は今夏を太平洋岸なる千葉の一角に過したため白面聊
かの黒きを加へた。彼の戯曲弘法大師御利生記は編輯当番の
鶴首した処であつたが遂に來なかつた噫焉。シングも同様に
おヂヤン。先(生)——補足筆者)シングを張つて船頭の娘にで
も恋して無中なのかも知れない。(中略)

芥川龍之介と戯曲

□メ切間際に來た柳川の「青年と死」とは頗る光つたものである
島村先生の赤と黄の黄昏などで気持の悪くなつた人達にはい
い清涼剤であるかも知れない(傍点原文のまま)

この記事によれば、龍之介は戯曲「弘法大師御利生記」と「シ
ング紹介」②(第三次『新思潮』1巻7号、大3・8・1)の統編の執筆
を前もって同人に約束していたにもかかわらず、まとまらなかつ
たために、その替りとして「青年と死と」を書きあげたもののよ
うである。「弘法大師御利生記」と「シング紹介」統編は、共に
葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』(岩波書店、昭43・2・13)に収
められている。「シング紹介」は冒頭の短い断片が残っているだ
けだが、「弘法大師御利生記」の方は、話の大方が分かる程度ま
で書き進められている。貧しい一家が旅僧に一夜の宿を貸した所、
その功德で盲いた老父の目が直り、初めは喜んだものの、やが
て以前の自足感は不平に変わっていくという内容である。これは、
明らかにシングの戯曲「聖者の泉」(“The Well of the Saints”、